1992・3

通信 おなご

38

発行
岩手県北上市和賀町長沼5～343～3・麗ら舎・小原麗子

ブルトーザ乗り　青木さん。田んぼ作って
[illegible]で息づいだな。そえでもま
だね。酪農もあったのサ。
三十四年がら米づくり始めで、三十七ヘクタ
ールの開田しまだ半分でしョ。
今度は南開拓ね。千葉茂雄さん、菊池音治さ
んだぢの方の開田。三十五年、三十六年とやっ
たが、あの時、あの付近で初めでブルトーザー
ず物でネ、田んぼ作しェだの。
あそこは五十ヘクタールの水田。
ほんとうに世話になった。阿部泰男っていう
人。農林事務所のあのんはねえ、県下の田作せ
えだ。
一番、ひでえがったのは、水の問題でねえす
か。水利権の問題ね。和賀中央土地改良区、あ
そごに行ってお願いして、判子もらって、水も
らわねえねえ。
水下さ行げば、環さんどが話し合いでね。皆
気持良く分ってくれで……。
水足りねえ時は、一札、書いでサ。戌田（水
下）の勇助さんなが、元気で……。
奥さん・そう、そう。いまでもそのんだぢど、
つき合いがある。

青木さん・四十一年の年にもまだ田んぼ作ったんだ。こっちの北南拓の方もネ。ホレ、いままでの二町五反の半分ぐらいだったのを、全部、田にすたのだから。畑なしに。

最初の南田の方は、水路流れでるべ。今度はポンプ据え付けで、高い所も全部、田んぼにした。

奥さん・全部だったをね。全部……。

青木さん・あの頃は、南田ブーいでね。

奥さん・米の方(米作りの方)とっても楽だった。

土地を売る

青木さん・列島改造論、出だのえずだて(昭和四十七年六月十一日、田中角栄「日本列島改造論」を発表)その頃がらこの辺りの土地、上ってきたんだ。

入植した頃は、坪、一八円かて、全部で二町五反で、千八百円かて。

伊東さんてあの人は満州で、馬ッコの方、軍医だった。それで、小原重助さん、あの人ど満州で一緒で、あ人を頼ってこごさ来たの。

奥さんは、県職員だった。百姓のしない人でなんぼか当時、病身だったなあ。

伊東さんは不、やっぱり百姓やったごどねえがらサ。わかねえだっけ。そえでも、田んぼになってからは、良かったけどもね。それでも、さっぱり能率上らねえんだ。

そこの、三菱さんに不、「三菱自動車販売店」に、土地を売った。坪、何ぼだったかな。高げえもんだど思ったったなあ。

全部、売ってしまった。二町五反。

で、小原重助さんの世話でサ。あそこ、高屋、あそごさ、東光商店っていう店を作ったの。

先に土地を売り始めたのは、平和台。

平和台、いまは町だべ。

奥さん・あそこ、元は家、何軒もねえがったんだを……。

青木さん・田んぼ作ったがらって、借金は雪ダルマのようになってしまう。たいがいの家はねえ。

普通、三百万円。多い人で五百万円ぐりえ。

なんぼ、田、作ったってね。それで安定はしたけれどもネ。見通しはついだけれども、まず、負えだったんだもの。

奥さん・そうだね。

青木さん・制度資金、酪農やった借金。五年、十年、十五どがの保証で資金借りでるス。だから、金欲しがったの。「金」っていう誘惑に負げだんだなあ……。「土地」売ったのは……。

奥さん・家でも売ったの……。いま、住宅団地になってる。一町二反残してね。

息子は一人だども、学校に入れたりして、かかるはだもの。息子は、いま、市役所に勤めでる。

（おわり）

へ一九八二年一月三日／北上市飯豊町宮村崎野／青木勝三さん・62歳／ミキさん・54歳 談〉

酪農一年生

小原 昭

狠忘恩にしていた馬喰が
久し振りに来た

「いやあ……せんぶ 牛 立派になったなあ
なに、親父居る時より板がってるべ
ンニャ、これだればニ十万円以上するな……」

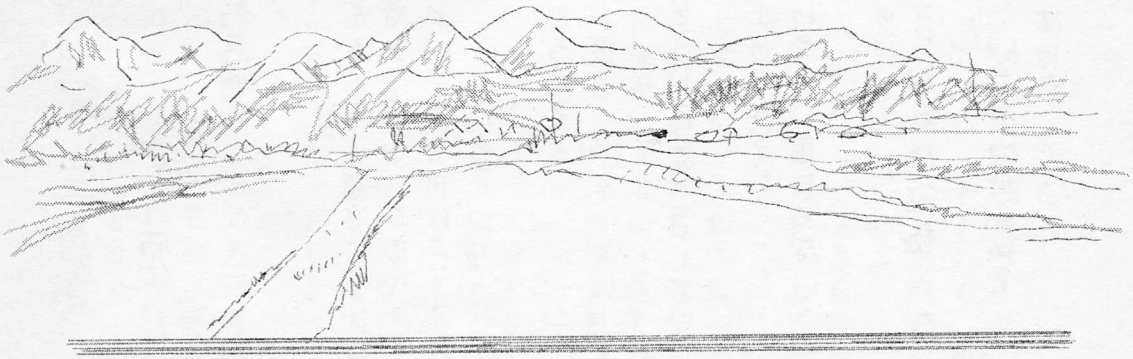
腕組みして
「ちょっと立てけろ」と
クツの先で 牛の尻を ポイッとけった

牛は気持ち良さそうに寝て反芻していた

これまで気にも止めなかった
その仕草 足でけるとは面白くない
いや、気になるのは
酪農家 一年生になれた証拠かなと、
草を刈りながら いつの間にか私も
くり返し 考えていた

笛の音 ―― 高橋ふさ

わが前に色鮮やかに小学生の鬼剣舞が広がりてゆく
五十人の鬼剣舞が一様に開ける扇夏の日はじく
太鼓うつ小さき腕のしなやかに音は炎暑の空よりかへる
炎天の小高き岡に風ひかり鬼剣舞の頭髪なびく
直向へる山の緑にしみとほり鉦笛太鼓ひとつの音す
いっせいに髪逆立てて大地ける鬼剣舞をわれは見て立つ
昼過ぎの暑きのたつ芝草に鬼剣舞の笛の音しづむ
暑き空切り裂くごとく剣舞の動く力がしばしば光る
踊り終へ華やぐ衣裳の遠ざかり広き芝生に笛の音残る
剣舞を踊り終りて汗を拭くいまだ幼き少女らの顔



たろいの里 ―― ふさの歌 ・ 7

祖母

12

・高橋　ミツ

西の下にある、いとこの家だけ名前を呼ばれ三軒から見て向うの家は、「ともこうし」と呼ばれていた。

何があっても相談し合い、大人も子供も皆それぞれのかたちで仲良くつながっていた。

並んでいる三軒のうしろには、こんもりとふさるように大きな杉の木の林があり、昼でもうす暗く真すぐな杉の木がそびえていて、丸山と呼んでいた。

この丸山には、おそろしい「チョウメンコ」という、オバケがいるという言い伝えがあった。

このチョウメンコは、泣く子や、ウソつき、親の言うことを聞かない子は、たちまち聞きつけてさらってゆくということであった。

村の人は皆、そのことを知っていて、もし誰かなかなか泣きやまないでいたりすると、たちまち見つかった人に言われてしまうのだった。

「あらあ、わかったあ、ここに泣いてる子が居たのがあ、まんずきようは、丸山のあたりで変な声したと思ったら、やあっぱりチョウメンコだったんだあ。やめろ、やめろ、まだ、どこの子がわがねえうちにやめろ」と、声をころして言われてしまうのだ。

口うらを合わせて婆たちは、一致協力、まことしやかにチョウメンコの恐ろしさを世間話風に仕立て上げ声までひそめて噂ばなしをしているのを、いつか泣く子もひきずりこまれて、まだ心残りながらもパッ悪くやめてしまうのだった。

こわいものは一つはいあって、「赤てどり」もこわいものの一つであった。「てどり」とは大きな鉄ビンのことで、なぜ、赤い鉄ビンかオバケなのか不思議なことであったが、それが私の家の「まつおなし」という梨の木にぶらさがったり、隣りの「ふくべなし」とか、そこここにさがったという噂は、子の目には妖怪じみて気味悪さがあっても、この赤てどりが、具体

的に何をわるさするオバケなのか見た人も聞いた人もたよりなく、大人だけが知っている世界のようであった。

しかし、何と言ってもこわいのは、「丸山のチョウメンコ」で、大人たちがリアルに話せば話す程、底知れぬ恐ろしさを感ずるのだった。

私の祖母は、さらって行って食うと言ったし西の婆は、こんがり味噌つけて焼いて食うと言ったと言うし、いとこの婆は、「豆の粉つきなこ」をつけて食うとも言ったし、少しずつ、その家によって違うのもまた、不思議なことであった。

今考えると、サンタクロースがいるか、いないかみたいな考えだったろうか。

私の父は気がみじかくて、言うことを聞かなかったり泣きやまなかったりすると、ものも言わず、「チョウメンコに食わせてやる」と、杉の木の下に置いて来てしまうのだったが、置かれたら子供は、いまにうしろから恐ろしいチョウメンコが追いかけて来そうで、ふるえるはだしの足で逃げるのだったが、そんな時、拾てに行った人は、あとは知らないふり、かわりに祖母か祖父が「もうしない」とやくそくさせてあやまらせ、いいようになることを誓わせるのだった。

これは、親と祖父母の役割分担が暗黙のうちにきまっていて、親が叱れば、祖父母がなぐさめる役だったと思う。現に、つれて来た祖母に、「婆は甘くて困る、きょう一日はなんとしても杉林にほうりこんでおくつもりだった」と、文句を言って見せると、「そこをなんとか、俺でもってやめさせるから、さあ、お前もあやまれ」と、祖母が言うと、母もしぶしぶ「婆がそう言うなら」というかたちで終わるのだった。

子供もまた、そう終わるのを知っているふうもあったが、何しろ杉林はこわいし、だまって終わるのも、カッコつかない部分もあり、これが一番安心出来る終わり方であった。

丸山には、いつの時代からかわからない捨てものを捨てる場所があり、掘りおこすと、紫色のあざやかな色をした、カケ皿や鉢などが出て来たり、何に使ったか、みどり色のガラスなどが出て来たりしく、そろって拾いに行って、ままごとをしたり、くだいて「あめ売りごっこ」をして叱られたものだった。こわいながらも、そろって山に入ると大丈夫という気持があって、つばきの花のくびかざりや、「あおきし」の赤い実など取ってきてあそんだものだった。

しかし、やはり杉林はいかにもチョウメンコのいそうなところで、いつか私の頭の中には、

黒いマントのようなものをビラビラさせて、くちばしの太く大きな目のするどいチョウメンコの姿が出来上っていて、林の中の暗い部分で見られているような気味悪さがついてまわるのだった。

（つづく）

根の乳垂り便り

書聞14

まつを媼・

31　石川純子

「ひとりコで寂しくないスか、何してスかって聞かれるが、何の寂しい、仕事次々あるもの。

「目は見えねえ、耳は聞けねえ、ホでも、せっとコ、八十枚年賀状出したが、ちりたり、ちりたり来るから、また十枚書き足して……

純子さんからは「前書き」もっと長くしろッ宿題出されてだし（笑）。（※媼は『白寿の青春』という本を刊行準備中）

昨晩も寝たの、三時半だったよ。

ポキポキと思い出したバリで、そいづ文章にしたタて、とどろなくなって（しまりなくなって）さあ大変。ンだから、何でも三十一文字にまとめでしまうの。その方、楽だね。

前書きサ付け加えッぺて、「辞世の歌」四つばり書いて汲たっタ、如何たべて（どうだろう）本式に短歌コ習ってないからなあ……。

先ず、

「純情の道ひとすじに百年を
　歩みしいのち我に悔いなし」

オレ、そう「百年」て言って良いンだチャな（笑い）

こいづ、「純情の道ひとすじに八十年」ても歌ったし「純情の道ひとすじに九十年」ても歌ったし、「八十年」から歌い初めて、なんど、「百年」になってしまた……（笑い）

どれ、二つ目は、

「幸せを計る計器は何ならん
　けわしき道を過ぎ来しも幸」

この歌コ、わだし一番言いたいの。必ずしも安逸だけが幸せではないッごと。こいづ、わだしの哲学だね。

幸せば、苦労の後に来るッの流行り言葉になってッから言いたくねンだが、オラ平凡に生きて来たより、この道百年が全部尊いよ。もっと苦しんで来ても良かったよう。

今だって出来るだけ、そちこちの苦しみ拾う気になってるもの。

過ぎた道、安易に暮らして来た夕て、何も思い出ないよ。

おじいちゃん（夫）は政治家だから、勝算ねのサは手え付けね、オレは苦労している人サ付いで、すーぐ口入れしてしまうんだな。

過ぎてしまうと苦労位良いものないよ。

次は、

「幾山河越して来たりし百年の
その足跡をいとしく思う」

これ今の気持ちだよ。自分の手足見て、この手でなあ……この足でなぁ……何でもやってケだったな、この手足、「ありがと」て。この手足可愛くてしゃね。（しようがない）

「足跡」残して来たよ、いっぱい！

私から始まって勘定すッと、血筋の通ってンの、五十何人になってんダド。そいづら、自分がひとりコで出たつもりになって活躍してんべな……（笑い）

しかし「幾山河」て、どッかで聞いたことあるべ、「百年」をこッスることになるがら止めンべ、この歌コ、「辞世の歌」サばえれねべ。

次のは、本当の今の心境。

「思うこと大かた成し終えりさぎよし
浄土への旅はるか遠きも」

『白寿の青春』出せば、大ッき仕事終わったなあ。この本コだって、相手になってくれる人あるから、とっぽり、とっぽりと思い出が出て来て、まとめンの良いの。純子さんのおかげで、老後楽しく過ごせるなあ。

待ってろよ。（待ってなさいよ）「辞世の歌」決めねばねンだが……。

「純情の……」と「幸せを計る計器……」と、「思うこと大方成し終え……」の三つもあれば良いべダラ（でしょう）。なんぼ死ぬに面がある夕て、「辞世の歌」なんぼもかんぼも遺す人ねんだ千ヤな。（笑い）

宮古市・中沢　彰

『通信・おなご・37号』私見。

勝手なことを書かせていただきます。

「垂乳根の里便り」、ますます佳境に入って来たという感じです。いわゆる、シモの話しなのに、いやらしくないというか汚らしくないように読むことができました。

「垂乳根」は、関西においては、延陽伯（えんようはく）と言います。とは言っても、これ落語のうえでのことです。いわば古典落語の有名な演目であります。

落語にでも匹敵しそうな、共通の面白さです。語り手と聞き手の息の合ったコンビぶりは、漫才そのものと言えるのではないかとさえ思います。

いかなるトーク番組でも聞き手にその才がなければ、つまらないものになります。聞き手がその才にたりていればいるほど、語り手は引き込まれて語ってしまうのではないかと考えます。

それにしても、九六歳という語り手、感覚が若いというか柔軟性というか、かなりの勉強家、勉強家と言っても苦学をしたというより、実生活に裏付けされたとでも言うべきもの。社会の勉強をしたとでもしましょうか。飾りのないユーモアのセンスというものは一朝一夕で出来るものではないということでしょうか。

「モッコふんどし、てし」「さーてモッコて何だべて、しというくだり。普段でもその言葉の意味さえ知らず使っているというのは良くあるのではないでしょうか。だいぶ前、友人との会話でこんなことがありました。

「おめえさん、スカスのがうめえがらなあ」と私。「スカスって何だぁや、はぐらかすごとがて、」と彼。「まあ、そんなもんだぁなあ」と私。そういえば、落語の、たらちね、もしくは、延陽伯にも同じようなくだりがあります。

「あーら我がきみ、しらげのありかはいづくなりやてこ」「しらみのありかて、うちにはしらみなどおりまへんで」「わらわの申すはよねのことし」「あんた、よねやん知ってまんのんか？」「人の名ならず、わらわの申すは、こめ、のことし」「こめ、なら、こめとはっきり日本語で言ってくんなはれ」。たしか、こういう会話だったと記憶していますが。長屋暮らしの一人やもめのさる男に嫁入りしてきた、さる公卿の家に長い間奉公をしていたという女性。ただ一つの欠点は言葉が丁寧すぎるということ。そんな二人が織り成す、お話しなんであります。惹のことを、しらねぐさ、と申すそうでくだんの女

おたより

性が言っております。さて、延陽伯とは私も良く知りませんが、緑良う掃く、というシャレからきているというのですが。

下手な落語や漫才よりはましとでも言ったらおかしいですが。でも、落語や漫才とちがうのは、この九六歳になるという語り手は人を笑わそうとしてこんな話しを持ち出して来たのではないと思うのです。けれどもそのおかしさに、つい笑わされてしまう。これはもう無意識の笑いではないかと。落語　漫才でも無理に人を笑わそうとしている芸は、どこかつまらないものです。

何か、話しがそれましたが、まあ、今後の延陽伯の里便りの成り行きに注目しているのであります。

横浜市・原田周治

まっを盥さんは、九十六歳になられていることを知りまして、恐れ入りました。さらに、長生きをしてもらい、遠慮なしに、われわれを叱咤してもらいたいものです。考えて見ますとき、長生きとは、いのちの芸術かもしれませんし、老いるとは、いのちの留学ということになるかもしれません。人みな、このように生き、このように解し、温かく見守ってあげたいもの、現実は逆です。

たるいの里、ふさの歌、高橋さんの三十一音は、いつも清々しい気分にひたらせてくれます。

土台が、しっかりとできていらっしゃるから、一つ一つの文字、言葉が、安心して遊ぶほどの余裕をもっているように見受けられます。三十一音を勉強したいものです。もしも留学できたら、、、。

福島市・川崎タツ工

おたより

「おなご・ろ」、橋を渡る日々「とっちゃんのふしぎなぼうし」よみ終えましたが、「みそれの日」後日談をたのしみにしております。

私も元気といいたいのですが、最近とても足が弱り、ひどくなるので、只今、検査中です。

でも、口は達者で威張った様な口のきき方をしています。

・乳飲み児を横抱きにして壕に入りし
　空爆の日を彷彿とせり

・ロックにて反戦訴ふる若き歌手
　吾も詠まんか平和の祈りを

千葉市・山本栄子

「垂乳根の里便り」、老いをこんなに、おおらかに語れて、すてきだと思いました。
〝失禁〟、自覚しないうちに、そそをしてしまい、シヨックも大きいでしように、〝先頃、大変なごとしたあや〟と、語れる、心の大きさ、ゆたかさに圧倒されます。老いていくことに対して、とても明るい未来を感じました。
私も、こんな生き方をしたい。
今、つれあいの弟が、ガンで入院中で、母が手伝いにでかけています。弟の彼女は、5月下旬、二人目を出産予定です。彼女のおなかのこともあり、当人をはじめ、告知されておりません。母もつれあいも、とても言えないということで。
いずれ、彼女を心から支えてくれるのは、実家のご両親であろうと思い、ご両親には誠し、相談しています。弟、41歳、彼女31歳、長男4歳、結婚五年目です。とても仲の良い夫婦で、私の子供達も、二人をしたっています。（略）

橋を渡る日々 ―― 38

みぞれの日・Ⅱ⑪

×月×日

いま、みなコちゃんたちが住んでいた住宅は、無人になっています。
どこの家よりもきれいだった玄関に、スギナが密生し始めました。明りも時々しか見えません。人が居るのか居ないのか、障子が破れ、窓辺に猫だけが、じっとすわっていることがあります。
みぞれの日以後、みなコちゃんは、一、二度遊びに来ました。敬一先生の童話を読み、手紙を出したら、返事がきたと喜んで知らせてくれました。
みなコちゃんのお母さんとは、バス停までの行き帰りに、何度か会いました。目鼻だちのはっきりした人で、みなコちゃんとは似ていません。挨拶をしても笑顔がなく、じっと考え込んでいます。わたしは自分の挨拶の仕方に落度があったかと、反省したものでした。
そのお母さんが入院したと、人伝に聞き

2ました。精神を病んでいるというのです。弟をかばうようにして遊びに来た意味が、わかりました。

入退院をくり返していると聞いた夏の日、わたしはバスから降りて、小学校の所まで歩いて来ました。

「たいへんだ、先生に知らせてこなくては」と、ゴウフンしている高田さんに会いました。

子どもが、スコップで殴られたというのです。殴ったのは、みなちゃんのお母さんだと分りました。幸いこどものケガは大事にならずにすみました。

もう、猫の姿も見かけません。玄関には、しばらくお父さんの名札がありました。みなちゃんのお父さんは、大工さんだと言います。お母さんは、学校を終わっていると聞きました。

「学校を終わっているしとは、高校以上という意味が込められています。

なにが原因で精神を病むのだろう。お父さんの実家は、町内だといいますが、そもそも、お父さんが長男だとすれば、どうして町営住宅に住むのだろうか。やはり、それにも原因があるのかと思ってしまいます。

また入院したお母さんに変って、みなちゃんは、食事を作り、まさみち君の面倒を見ているのでしょう。

もう、みなちゃんは中学生です。

初冬の風の強い朝、弟をかばうようにして歩いて来るみなちゃんの姿を見かけました。

始業時間は過ぎています。お父さんの実家から、バスで来て、遅れてしまったのでしょう。

わたしは、二人をじっと見送りました。なぐさめの言葉は言えません。

が、わたしは、二人に声を掛けるタイミングを待っています。待って、「みそれの日」から六年がたちました。あきらめてはいません。

みなちゃんは高校生、まさみち君は、中学生になったはずです。

（おわり）